掲載日：2008年11月20日，面名：M405X0，記事ID：K20081120M405X0040(C)河北新報社

支援学級生ら合奏

仙台二中でNPO演奏会 学校と住民が協力

障害のある子どもたちに音楽や造形指導を行っているNPO法人「ミューズの夢」のコンサートが十八日、仙台市青葉区の仙台二中（生徒三百五十五人）で開かれた。

ミューズの夢メンバーが歌やトランペット、マリンバなどを演奏。最後に、同校特別支援学級に在籍する生徒九人とボランティアの生徒も太鼓やタンブリンで加わって「風になりたい」を合奏、全校生徒や地域住民らに楽しい音楽を披露した。

学校と住民が協力し元気な地域づくりを目指そうと、同校と市木町通市民センターが行う連携事業。ミューズの夢が学区内に事務所を置く縁で実現した。

特別支援学級の生徒の一人は「一生懸命練習したので、楽しんでもらえてうれしい」と満足そう。

ミューズの夢メンバーと一緒に合奏を披露した仙台二中特別支援学級とボランティアの生徒たち

ミューズの夢の仁科篤子理事長は「みんなが幸せな社会について、考えるきっかけになれば」と話していた。

日第三種郵便物認可】　©河北新報社 2008 （日刊）

奥州仙台銘菓
支倉焼
はせくらやき
ふじやつ千代　本店（SS30隣）　☎222-5305

河北新報
2008年（平成20年）
2月12日（火）
夕刊
河北新報社
仙台市青葉区五橋1-2-28
（郵便番号　980-8660）
電話（022）211
総合案内　1111
読者相談室　1447
夕刊編集部　1146

手づくり音楽劇に託す夢とは？

にしな・あつこ　仙台市出身。「ミューズの夢」で音楽を楽しむ生徒は約50人。希望があれば会員が地域で教え、西多賀病院などで出前レッスンもしている。「あいうえおばさん」公演は8月3日、太白区文化センターで。公募しているのは心身に何らかの障害のある4―15歳の子。締め切りは3月3日。連絡先は、事務局022(222)0198、ファクス(267)9540。

逸一 答問

仁科　篤子さん（52）

NPO法人「ミューズの夢」理事長

障害ある子に創造の喜びを

あいうえおばさん
かきくけこんにちは
さわやかさしすせ
そよぐかぜ♪

五十音の言葉を遊ぶ楽しい詞。弾むようなリズムに乗せ、子どもたちが歌う。田舎のおじさん、おばさんを訪ねて、わくわくする冒険の話に聞き入りながら。いろんな動物も登場してきて…。

ミュージカル「あいうえおばさん」の一節だ。仙台在住のここや（本名山田耕一さん）作の同名絵本（星雲社）をヒントに、仁科さんら「ミューズの夢」が手づくりで舞台化し、三年前に仙台で初演。旧岩出山町（大崎市）、石巻市の公演も好評だった。

「さまざまなハンディのある子どもたちが主役です。地元の小学生の出演者や、大人とも一緒に練習を重ね、音楽を通してつながる。そんなミュージカルをぜひ根付かせ、全国の特別支援学校などでも上演してもらえる運動に育てたいのです」

八月、仙台で装い新たに再演する。出演する子どもたちを公募中だ。支えるのは仙台で芸術活動をする人々。作曲家八島秀さん、演出家今野仁さん、民話研究家小野和子さん、美術の関口怜子さん、指揮の工藤欣三郎さん。合奏団もクラシックのプロだ。

「公演スタッフ百数十人の大半がNPOの会員です。演奏家や講師、音楽専攻の学生、保育士や医師、歌好きな社会人…。人のネットワークで障害のある子の創造と楽しみ、発表の場をつくりたい。そんなNPOです」

仁科さんもピアニストで、「ミューズの夢」を設立して六年目になる。青葉区支倉町のスタジオでは歌や合奏、リトミックや創作の教室があり、知的障害やダウン症、自閉症などの子どもや若者が通う。目の不自由な中学生の女の子もいる。ピアノが大好きで、レッスンを重ね、見事にショパンやドビュッシーを弾く。

「昨年のクリスマス発表会では、その子の伴奏で、初めて独唱に挑戦した娘さんもいます。教室の仲間に励まされて。舞台が自信になり、声も表情も変わってきました。仲間と一緒に成長する姿を見つめていけるのが、私たちスタッフの喜びです」

武蔵野音大を卒業しプロになってすぐ、先輩たちに誘われ、養護学校や施設、病院を巡る出前演奏をしたのが原点という。自らも「ピアニストアッセンブリー」という団体をつくり、仲間との演奏会を重ね、障害児たちの通う保育所を応援するチャリティーコンサートも開いた。

「でも本当に音楽に触れたいのは、演奏会に足を運べぬ子、ピアノを習えぬ子でした。『教えてくれる教室もない』という母親の訴えも聞いて。それなら私たちが場をつくろう、と友人知人に呼び掛けたのです。音楽の恵みを受ける仕事の人間がその幸せを広げなくては、と。大勢の人の夢が託されたNPOです」

ミューズはギリシャ神話の芸術の女神。「皆が彼女の夢を分かち合う、優しい街にしたい」と語る。障害のある子もない子も大人も一緒につくる「あいうえおばさん」の上演は、そんな運動である。

編集委員・寺島　英弥
写真部・坂本　秀明

2008 7/18
河北新報
郵便物認可

くらし

共生の歌声 再び

大勢の子どもが主役のミュージカル「あいうえおばさん」の練習風景

田舎の森を舞台に命あるものの共生のすばらしさを歌うミュージカル「あいうえおばさん」が八月三日、仙台市太白区文化センター・楽楽楽ホールで催される。ハンディのある子どもや若者と音楽活動をするNPO法人ミューズの夢（仁科篤子理事長）のオリジナルだ。

音楽劇「あいうえおばさん」

ミュージカルは、ここや（本名山田耕一・仙台在住）作の同名絵本（星雲社）と歌をヒントに、作曲家八島秀さんら「ミューズの夢」にかかわる多彩なアーティストが制作。三年前に仙台で初演され、その後石巻市などでも上演されて好評だった。

劇の舞台は、懐かしい時代の田舎。おじさん、おばさんの家を訪ねた少年と少女が、話に聴き入るうちに、森の住人のさまざまな動物たちと出合う。五十音のわらべ歌のような主題歌が楽しい。

今回の再演では「森の動物たち」の役を一般から公募。自閉症やダウン症などの小中学生十八人が、四月から日曜日ごとに練習を重ねてきた。

おばさん役のソプラノ歌手北村裕子さん、おじさん役のテノール歌手松尾英章さん、仙台のプロ演奏家の合奏団をはじめ、児童合唱団、有志の混声合唱団が共演。演出家今野仁さん、指揮者工藤欣三郎さんの指導で芝居と音楽を支えている。

障害ある子ら練習に汗

美術家関口怜子さんが舞台美術のリニューアルを担当し、東北文化学園大の学生ボランティアも大道具作りや子どものサポート役を務めている。

「大勢の人がつくる舞台は、柔らかで包容力のあるまちづくりのメッセージ。ハンディのある子、健常な子、お母さんたちも一緒に見て歌って」と仁科さんは話している。

八月三日午後二時開演で、前売り券はプレイガイドで一般二千円、高校生以下千円。連絡先はミューズの夢022（222）0198、ファクス（267）9540。

来仙 3日台

掲載日:2009年07月01日,面名:LB0XX0,記事ID:K20090701LB0XX0040(C)河北新報社

障害児と音楽キャンプ

26日宮城・利府 NPOが企画

仙台市のNPO法人「ミューズの夢」(仁科篤子理事長)は、心身にハンディのある子どもたちが親と一緒に音楽を楽しめる「サマーデイキャンプ」を26日、宮城県利府町の森郷キャンプ場で行う。

サマーデイキャンプは5歳以上の子どもが対象。さまざまな楽器を触っての音楽体験、リズム体操、森にある材料を使った創作、ドラムの即興演奏などのクラスを設け、プロの演奏家らが指導する。また、親たち向けの合唱クラスもある。

ミューズの夢は、仙台市内外で活動する音楽・アート関係者の芸術サポート団体。自閉症やダウン症をはじめ、ハンディのある子の音楽と絵の教室や、国立病院機構西多賀病院(太白区)や県立こども病院など各地での訪問教室、出前コンサートも行っている。

初開催となるキャンプは26日午前10時～午後3時半の予定。募集は親子ペア30組で、参加費はひと組7千円。10日が申し込み締め切りで、連絡先はミューズの夢事務局022(267)9540(ファクスも)、メールはinfo@musenoyume.jp。

掲載日：2009年08月23日，面名：LB0XX0，記事ID：K20090823LB0XX0010(C)河北新報社

きずなつなげて15年

宮城・蔵王 難病児の夏キャンプ

live とうほく

宮城蔵王で今年も8月上旬、難病の子どもキャンプ「がんばれ共和国」が催された。仙台市の小児科医らが「どんなに障害の重い子どもも夏休みを楽しめる」場をつくって15年を重ねる。きずなを強めた家族が運営の担い手に加わり、学校の合唱団やNPOも楽しみのイベントを持ち寄っている。この夏、仙台圏で障害のある子どもの音楽キャンプも生まれ、支える人たちの運動としてつながり始めた。

医師、保護者ら連携

NPOや高校生らも参加

8月7日から3日間、宮城県蔵王町のホテルを貸し切りにしたキャンプには、宮城、山形両県から子ども35人と、親、きょうだいを合わせて計110人が参加した。子どもたちは、患者でなく「キャンパー」と呼ばれる主役だ。

「共和国」建国式の後、花火、熱気球、乗馬や馬車、二つのコンサート、ステンドグラス教室、バーベキュー、大演芸祭り、温泉を楽しんだ。

「ボラさん」という支え手は八十余人。小児科医10人と看護師25人、そして宮城大や東北福祉大で看護、福祉を学ぶ学生だ。父親たちが一昨年結成した「おやじ団」も、力仕事や大演芸祭りで活躍した。

「親たちは実行委員にもなり、準備会合から参加してくれました。つながりを深めたいと昨年から、芋煮会や新年会など親同士の集いも始めたんです」。初回から代表を務める仙台市の小児科開業医、堺武男さん(60)＝前同県立こども病院副院長＝は「キャンプが育てたもの」を語る。

きっかけは1993年。神奈川、福岡でキャンプを始めた「難病のこども支援全国ネットワーク」(東京)のシンポが仙台であり、当時東北大病院にいた堺さんは活動に共感。小児科医の仲間や患者の家族に呼び掛け、2年後に蔵王のキャンプが実現した。

以来医療者が全国的に支えるキャンプは全国にもないという。今年も、こども病院や同県拓桃医療療育センターの専門医が参加。Tシャツや水着で、世話役や入浴介助、楽器演奏や隠し芸も行った。

キャンプを始めるまで、障害のある子を一人で風呂に入れた経験がなかった、と堺さん。「家族の日常にいかに苦労が多いかを知りました」

キャンプでは、診察室からうかがえない、家庭の暮らしや親子の関係が見える。「ボラさん」としての触れ合いから、子どもの気持ちや体のことも自然に分かる。「子どもの『育ち』をみるのが小児科医の仕事ですから」と語る。

コンサートの出演は、仙台の尚絅学院の合唱団と、NPO法人「ミューズの夢」(仁科篤子理事長)。仙台に教室を開き、ハンディのある子と音楽を楽しむ活動を行う。

バイオリンから合唱、サンバまで、ミューズの教室の子どもたちの演奏と歌に、会場のサロンいっぱいの親子が手拍子を打ち、体を揺すった。「子ども同士が響き合い、素晴らしい交流」と、自身もピアノを披露した仁科さん。

ミューズの夢も7月、「音楽を親子でたっぷり楽しめる夏休みを」と、演奏家らがボランティアになる日帰りキャンプを催し、盛況だった。

大崎重症心身障害児(者)を守る会(大友祥子会長)も「キャンプを地元でも実現できたら」と語り合う。今年の蔵王のキャンプには、仲間の家族や、応援する大崎市民病院の小児科医が参加した。

堺さんら実行委は、「難病の子ども支援東北ネットワーク」を昨年末に立ち上げた。子どもたちを支える人々をつないで、キャンプの参加者や運動を広げたいという。連絡先は事務局(さかいたけお赤ちゃんこどもクリニック)＝022(263)4976。

(生活文化部・寺島英弥)

熱気球や乗馬、音楽…。子どもたちと家族、支える人たちが楽しいキャンプを育ててきた＝8月上旬、宮城県蔵王町